人と人をつなぐ・・・

FURE サテライト新聞

2016年8月発行　第6号

FURE イメージキャラ めばえちゃん

発行

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター（FURE）

相双地域支援サテライト

TEL　0240(23)6675
HP　http://ifs.fure.fukushima-u.ac.jp/

笑顔でにぎわう

今シーズン初のひろのパークフェス

ショップにパフォーマンス 二つ沼公園で開催

広野町の二ツ沼総合公園を会場にする「ひろのパークフェス」の今シーズン第１回目が７月31日行われた。強い日差しが照りつける中、子どもから大人までが集い、楽しいひとときを過ごした。

同フェスは、27年度新しい東北」先導モデル事業　双葉八町村に春を呼ぶ！広野わいわいプロジェクト」広野サステナブルコミュニティ推進協議会）の活動の一環として、復興庁の支援を元に昨年スタート。いわきのアリオスパークフェス」と同様に、飲食のケータリング、アート作品、手作り雑貨を中心にしたカーショップ、パフォーマンスなど、幅広い年代が楽しめるイベントとして開いている。

今回は、飲食や雑貨、農産物など、全１店舗が出店。それぞれのブースでは、お目当ての品を買い求め、店主との会話を楽しむ人の姿も見られた。ライブステージでは、５組がパフォーマンスを披露、音で来場者を楽しませた。

次回は９月25日（日）に開催。問い合わせは実行委員会hirono.parkfes@gmail.comまで。

新鮮な地元野菜が人気

19のショップでにぎわった

写真を通して魅力発見！

川内村 初のフォトコンテスト

締切　来年１月20日

川内村では、初めてとなる「川内村フォトコンテスト」の作品を来年１月20日まで募集している。

「川内村の魅力発見～写真撮りさ、川内村に来てくんちぇ～」をテーマに、村の人、風景、自然などを切り取った作品の応募を呼び掛けている。

風景と、人物・イベントの２部門で作品を募集。風景部門では、川内村の田畑、森林などの風景や、自然に生息する動植物などで、人物が写っていても、風景が主体であれば可能。人物・イベント部門では、村内で撮影された被写体が人物主体のものや、村内で開催されたイベントの様子を撮影したものとする。

１人各部門２点までの応募が可能で、28年４月以降に撮影した未発表で他所で応募予定のない作品に限る。28年４月以降に発表応募票に必要事項を記入し、作品の裏面に貼って応募すること。締め切りは29年１月20日当日消印有効）。

作品は、遠藤雄幸村長や写真愛好家、報道関係者らが審査。最優秀賞１点には、賞状。賞金５万円、村の特産品、かわうちの湯入浴券が贈られる。このほか、各部門の優秀賞、審査員特別賞、入選数点などが選ばれる。

応募先、問い合わせは川内村役場総務課企画政策係＝〒979―1292川内村大字上川内字早渡11の24、電話０２４０（38）２１１１、ファクス０２４０（38）２１１６＝まで。

住民同士がつながりを持ち、新たな一歩を踏み出し、新しい楢葉町づくりにつなげようと、町民有志を中心に続けている交流イベント　ナラノワ祭」の第５回が７月31日、いわき市の楢葉町サポートセンター空の家で行われた。

１本１本の葉脈が１枚の楢の葉をつくるように、１人ひとりが手を取り合い、楢葉町の活性化、心身の本当の復興を目指そうと、佐藤努さんが立ち上げたプロジェクト団体　ナラノハ」が運営。ナラノハ郷土料理の振る舞いや、首都圏在住者を対象にしたスタディーツアーなどを仕掛けてきた。

約４か月ぶりの開催となった今回は、ガーデンカフェ地蔵庵　楢葉町山田岡）の高原あかねさんと、千葉県のシンガーソングライター坂本タクヤさんのライブや、仮設住宅婦人会の有志による弁当販売、Ｔシャツなどオリジナルグッズ作りワークショップなどを開催。温かな雰囲気の中、集まった町民たちの笑顔が弾けていた。

演奏する坂本さん㊧と高原さん

婦人会有志の恒例の弁当も好評

営農再開の歩み

楢葉町・上繁岡水田復興会

４・鳥獣対策

ここ幾年か、イノシシによる農作物の被害が全国的に広がっている。双葉郡内の場合、長期避難により、その状況はさらに深刻になっている。

イノシシの被害を防ごうと、復興会でも神経をとがらせ、頭を悩ませる。昨年の試験栽培では、イノシシの足跡が確認されている。

その解決策の１つとして、近年用いられているのが電気柵。電線を水田回りに張り巡らせ、電流を流す。イノシシの鼻が電線に触れると、それがスイッチとなって、電気ショックが与えられる。死に至るようなものではないが、イノシシはショックを嫌がり、その後は近づかなくなるという。

作業を行ったのは、７月中旬。柵を設置した。作付をしている上繁岡地内の２カ所に、町からの補助を得て設置した。

作業には、佐藤充男代表ら復興会メンバーのほか、東京電力の社員約10人も加わった。漏電を防ぐため、土手の草刈りをした後、柵を設置したが、２カ所の作業は予定よりも早く、それぞれ１日で終えることができた。

鳥獣対策が万全になったところで、後は出穂を待つばかり。佐藤代表によると、これまでのところ、生育は順調だという。

穂の出る時期に怖いのは、低温。これから花が咲くとき、太陽に出てもらわないと困るんだ」。気温が14度以下になると、実りに赤信号が灯る。この時期は、毎日テレビの天気予報を確認するのを怠らない。

稲刈りの予定は、９月下旬。無事に収穫の時を迎えられるか、お天道様の行方を気にする毎日は続く。

電気柵を張った水田。稲の生育は順調だ

楢葉もろもろ塾

楢葉もろもろ塾」が７月21日、いわき市平上山口の楢葉サポートセンター　空の家」で行われた。

26年のスタートから３年目を迎えたもろもろ塾。現在は、毎月第３木曜日に、同センターと楢葉町のあおぞらこども園を交互に会場とし、さまざまな手仕事などに挑戦してきた。

今回は、昨年12月の実施以来、好評を得ているそば打ちにチャレンジ。町民約10人のほか、夏休み中の楢葉町の小中学生約20人も初めてのそば打ちに挑戦した。

講師はおなじみの渡辺鉄男さん（富岡町）ら５人の手打ちそば名人が務めた。エプロン、三角巾を身に着け、大人も子どもも、汗をぬぐいながら一生懸命にそば粉をこね、力加減に気を付けて麺棒を伸ばし、細さを揃えるように慎重に包丁で切り、約１時間掛けて完成した。

打ったそばは土産として家に持ち帰ることに。昼食には、渡辺さんら名人たちが打ったてのそばを天ぷらそばで味わった。コシのある麺に、お代わりの声も上がっていた。

今後も、そば打ちのほかキノコ栽培などの予定がある。問い合わせは楢葉町社会福祉協議会＝電話０２４６（25）１０７７＝まで。

講師からアドバイスを受けて懸命にそばを打つ参加者

編集雑記

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター相双地域支援サテライトは、地震、津波、原子力災害を受けた相双地域の復興、住民の帰還を支援する拠点として設置されました。人に寄り添い、声に耳を傾け、大学としてできることを考え、日々実行しています。昨年８月の開設以来、さまざまな事業を行っていますが、その１つに、「ふたばの明日を考える会」というものがあります▼震災、原発事故後、双葉郡内８町村の置かれている状況は、それぞれに異なります。町村間の連携が取りにくい、職員同士の交流も難しいという話も耳にしました。それぞれの役場とも、平常の業務に加えて、復興推進のための業務に忙殺される中、役場職員が一堂に集まり、復興行政のあり方や、施策の事例、問題点などを、ざっくばらんに語り合ってもらおうと、昨年11月にスタートしました▼会議は毎月１回、８町村持ち回りで行っています。７月は、避難指示が解除された葛尾村の村役場を会場に実施しました＝写真。毎回、さまざまなことを話し合い、情報を交換しますが、現在、進めているプロジェクトがあります▼「双葉郡便利マップ」の製作、それがプロジェクトです。対象とするのは、主に地区外から視察などで双葉郡を訪れる人としているのですが、コンビニエンスストアや、トイレ休憩ができる場所など、さまざまな情報をご紹介しようと、現在作業を進めています▼リリース予定は11月で、掲載項目も決まり、各役場が寄せた情報を事務局のサテライト側で整理するなどしています。地区外から訪れる人だけでなく、郡内の皆さんにも役に立てていただけるものにしようと、編集作業に取り組んでいます。発行の際には、新聞でもご紹介致します。ぜひ、お楽しみに！